

国語科における書く力の育成について

—文章構造に着目した「読むこと」の指導を通して—

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース

M 0 7 3 1 5 I

大 柿 舞

1. 研究の目的

OECDによるPISA2003・PISA 2006の結果や、平成21年度全国学力・学習状況調査の結果から、自由記述など子どもたちの書くことに課題があると言われている。

また、筆者が平成20年12月に実習校（第3学年、男子15名、女子10名）で行った意識調査でも「書くことは好きですか？」について半数近い12名が「少しきらい」「きらい」と答え、「何を」「どのように」書けばよいかかわからないと答えている。

さらに現在、新学習指導要領で重視されている活用する力をつけるための方法として、教科書の記述などモデル文を模倣して書くという学習が数多く提案されている。（鈴木, 2009）それらを踏まえて本研究では、教科書の記述などモデル文の良さを見付け、それを模倣して書くという学習により、子どもたちの書く力を育成する指導法について、先行研究を分析し、授業づくりへの示唆を得ることを目的とする。

2. 論文の概要

本論文の構成は、以下の通りである。

第1章では、学習指導要領で求められる「B書くこと」を整理し、先行研究を分析して本論文での書く力の捉え方を述べた。次に、書くことの困難性について述べ、続いて、本論文の副題にもある「文章構造」の捉え方を述べた。

第1節では、平成10年版学習指導要領と平成

20年版学習指導要領の違いに着目し、学習指導要領の「B書くこと」の目標と内容をまとめた。

第2節では、大熊（1994）、岩間（2004）、難波（2008）等の「書く力」「記述力」の定義を整理し、本論文では以下のように捉える事とした。

書く力とは、

1. 主題に従って書く材料を集める力
2. 集めた材料を取捨選択して構成を考える力
3. できあがった構成表（あるいは構成メモ）に基づいて文章表現をする力、狭義の書く力
4. 書いた文章を推敲する力

第3節では、認知心理学研究の知見を引用しながら書くことの困難性について述べ、困難を克服するための手立てについて考察した。

第4節では、野村（2002）の定義から「文章構造」とその三つのレベルを紹介した。それを踏まえ、学習指導要領で規定されている文章構造を取り出し、まとめた。

第2章では、読むことと書くことの関連から書く力の育成を目指す、二つの研究を紹介した。

第1節では、活用する力の育成と関係した文脈で書く力を育成する研究を紹介した。まず、中央教育審議会（2008）から習得・活用・探究の捉え方を紹介し、書くことにおける活用する力を伊崎・安部（2009）を基に定義した。そして、活用する力としての書く力を育成するために、習得段階として読むことの学習を行う先行事例を紹介した。

第2節では、1980年代に盛んに取り組まれた読み書き関連指導の先行事例を分析しながら、これからの読むことと書くことの関連指導において何を重視していけばよいのかについて述べた。

第3章では、実地研究Iで筆者が行った授業実践について子どもたちに書く力を育成することができたのか分析を行った。

第1節では、筆者が行った実地研究Iの概要について紹介した。

第2節では、授業実践を分析する目的と方法について述べた。

第3節では、授業実践の概要を説明した。単元は「せつめい書を作ろう」(光村図書出版・3年)である。

第4節では、筆者の実践で書く力を育成することができたのかについて、分析の結果と考察を述べた。

分析は、第1章で定義した書く力を、本単元で児童に身に付けさせたい力として具体的に示し、児童の書いたワークシート、説明書を分析した。分析を通して、子どもたちに教科書の記述から学んだことを使おうという意識はあるが、結局は、表面的な理解に止まっていることがわかった。モデル文の明示的な特徴である、一文を短く書く、読み手に興味をもたせる目次をつける(「～しよう」等の誘いかけの言葉がある)はできても、暗示的な、絵を効果的に使用したり読み手に合わせた目次を構成したりすることができない子が多かった。加えて、子ども同士で書いたものを見直しをさせたが、ほとんどのペアが改善できていなかった。したがって、下書きの段階でよく書けている子を取り上げ、全体に指導する等モデル文の暗示的な特徴を具体的に指導することが必要だとわかった。また、

子どもたちにどのレベルまで書かせるのかといった評価規準・評価基準を教師自身が明確にもっておく必要があるとわかった。

第4章では、第3章を踏まえ、改善学習指導案として、評価規準と評価基準に基づいたルーブリックを取り入れた単元計画・評価計画の提示を行った。

第1節では、若林(2005)に基づき、評価規準と評価基準の捉え方を整理した。また、石井(2005)に基づき、ルーブリックの捉え方を整理した。

第2節では、高浦他(2006)からルーブリックを活用した授業づくりのポイントを紹介し、その中の単元指導計画のフォーマットに従って「せつめい書を作ろう」(光村図書出版・3年)の改善学習指導案を作成した。この時、次の点を盛り込むこととした。

1. 作文の各段階で、よく書けている子を取り上げ、どこがよく書けているのか、子どもたちに考えさせる場面を設定する。
2. 作文の各段階で、子ども同士で推敲する場面を設定する。

3. まとめと今後の課題

本研究では、教科書の記述の良さを見付け、それを模倣して書かせることで、子どもたちの書く力の育成を目指す実践を行った。しかし、分析から、表面的な理解に止まっていることがわかった。これは、活用する力としての書く力の育成を目指す他の実践でも見られることである。今後、ルーブリックを取り入れた改善学習指導案の元、実践を行い、先の問題の解決に有効か検証していきたい。

主任指導教官 原田智仁
指導教員 加藤久恵